

オペルクリカリアの育て方

Operculicarya

ウルシ科 / Anacardiaceae

ゴツゴツとした塊根と繊細な葉の対比。マダガスカル固有の「盆栽系コーデックス」として唯一無二の存在感を放ちます。

概要・魅力

オペルクリカリア (*Operculicarya*) は、ウルシ科 (Anacardiaceae) に属する小属で、マダガスカル・コモロ諸島・アルダブラ (インド洋西部) に固有分布します。ウルシ科というとウルシやハゼが浮かびますが、マンゴーやカシューナッツも同じ科の仲間です。Kew のデータベース (POWO) では現在9種が受理されています (Randrianasolo & Lowry, 2006 による属の改訂を基盤とする分類)。

この属の最大の魅力は、「コーデックスの塊根感」と「盆栽の樹形美」を同時に楽しめる点にあります。ゴツゴツとしたコルク質の幹 (パキカウル) は年を経るほどに趣を増し、ジグザグに折れ曲がる細枝に小さな羽状複葉がびっしりと並ぶ姿は、まさに小さな古木です。塊根部の成長は非常にゆっくりですが、それゆえに「同じ株を何十年もかけて育てるロマン」がコレクターを惹きつけてやみません。

属名は、果実の内側に形成される特徴的な「蓋 (オペルキュラム)」に由来します。この蓋は種子の頂部にも存在し、後述する実生栽培で重要な意味を持ちます。

代表的な栽培種は以下の2種です。

- **O. pachypus (パキプス)** : 「厚い足」を意味する種名のとおり、属内で最も肥大した幹を持ち、「塊根植物の王様」と称される人気種。マダガスカル南西部の石灰岩斜面に固有分布し、自生範囲は約400km²と推定される極めて希少な植物です。
- **O. decaryi (デカリー)** : 「elephant tree (象の木)」とも呼ばれ、属内では最も広く分布します。盆栽仕立てでも流通しており、入手しやすい種です。

SEEDSTOCKで販売する種子はすべて適法な流通経路で仕入れており、安心して求めいただけます。

オペルクリカリア属は雌雄異株です。種子を得るには雄株と雌株の両方が必要なため、自家での採

基本データ

🌱 成長期	夏型
🌡 耐寒温度	10℃以上 (O. pachypus) / 種差あり
☀ 日照	直射日光 (年間を通じて)
📅 播種適期	3～5月
🕒 発芽日数	前処理ありで早ければ数日～2週間
📍 主原産地	マダガスカル・コモロ諸島・アルダブラ
🌱 難易度	

種は難しいのが現実です。購入種子での実生であれば、この点は問題になりません。

置き場所

オペルクリカリアは年間を通じて直射日光を好みます。日照不足は徒長の最大の原因となり、本来のジグザグに折れ曲がった枝や詰まった樹形が失われてしまいます。できる限り明るい屋外で管理しましょう。

春～秋 (生育期)

戸外の直射日光下で管理するのが理想です。梅雨の雨ざらしも水はけのよい用土と鉢であれば概ね問題ありません。風通しのよい場所を選ぶと、根腐れの予防にもなります。真夏の強光でも基本的に遮光は不要とする栽培者が多いですが、急に屋外へ出すと葉焼けすることがあるため、光への慣らしは徐々に行ってください。

冬 (落葉・休眠期)

最低気温が10℃を下回る前に室内へ取り込むのが安全です。室内では南向きの窓際など、できるだけ日光が当たる場所に置きましょう。落葉後も光に当てることで耐寒性が向上するとされています。

耐寒温度は種によって異なります。園芸情報に基づく目安として、O. pachypus は約+1.7℃ (USDA Zone 10b 相当)、O. decaryi は約-3.9℃ (USDA Zone 9b 相当) とされていますが、これらは理想的な乾燥状態での目安値です。日本の高湿な環境では根へのダメージがより起きやすいため、実用的には10℃以上を確保し、5℃を下回らせないことを推奨します。

秋になると葉が紅葉し、やがて落葉します。これは「枯れた」ではなく正常な休眠です。春に気温

が上があれば再び芽吹きますので、慌てて水やりや置き場所変更をしないようにしましょう。

〇 水やり

オペルクリカリアの水やりは、**夏型コーデックスの基本**に沿って管理します。最大の失敗原因は過湿による根腐れです。特に休眠期の水やりには十分な注意が必要です。

春（芽吹き後）

新芽が動き始めたら水やりを再開します。いきなり多量に与えず、最初は少量から徐々に増やしていきましょう。

夏（盛夏・生育旺盛期）

用土が乾いたらたっぷりと与えます。屋外の直射日光下では乾燥が早いので、真夏は週1〜2回程度が目安になることもあります。鉢底の受け皿には水をためず、必ず捨てるようにしてください。

秋（気温低下とともに）

気温が下がり始めたら水やりの頻度を減らしていきます。葉が落ち始めたら、休眠期の管理に切り替えるタイミングです。

冬（落葉後・休眠期）

落葉後は原則として断水します。大きな株では完全断水でも問題ありません。ただし小苗や細根の多い株では「月に1〜2回、表面をわずかに湿らせる程度」にとどめることで、細根の枯死を防げるとする意見もあります。

「落葉＝枯れた」と誤解しての水やりが根腐れを招く最大のトラブルです。秋冬に葉がなくなっても慌てないでください。休眠中は根の活動がほぼ停止しているため、水を与えても吸えず、土が湿ったままになって根が傷みます。春に芽吹くまでは断水を守りましょう。

🔧 用土・植替え

オペルクリカリアの自生地はマダガスカル南西部の石灰岩斜面で、年降水量420mm程度の乾燥地です。栽培でも**水はけと根の通気性を最優先にした用土**が求められます。ピート（泥炭）など保水力の高い素材を多用すると過湿になりやすいため、無機質主体の配合を選びましょう。

用土の配合例

- 標準配合：硬質赤玉土（中粒）：日向土（小粒）：ゼオライト＝5：4：1（マグアンプK少量混入可）
- シンプルな配合：硬質赤玉土：日向土＝1：1
- 実生小苗向け：硬質赤玉土：パーミキュライト＝1：1（保水力を少し上げて発根を助ける）

鉢内の通気を十分に確保することが根腐れ防止の鍵です。排水性と通気性のバランスを意識して配合を調整してください。

鉢の選び方

地下に長く伸びる根を考慮して**深鉢（スリット鉢）**が適しています。塊根を鉢の上部に高植えて地上部に見せる仕立てが人気で、塊根の形状を楽しみながら育てることができます。

植替えの時期と頻度

植替えの適期は**4〜5月（気温が上がり芽吹きが始まる時期）**です。成長期の入り口に行くことで、根が早く回復します。頻度は**2〜3年に1回**を目安にしてください。根詰まりや用土の劣化が早い場合は早めに対応しましょう。

植替え時は、肥大した塊根（パキカウルの基部）を傷つけないよう丁寧に扱います。植替え後は**1週間ほど断水**し、傷ついた根の発根を促してから水やりを再開します。

🌱 発芽のさせ方

オペルクリカリア（特に *O. pachypus*）の**実生**は、前処理さえ適切に行えば高い発芽率が期待できます。ただし処理を誤ると発芽に数か月かかったり、ほとんど発芽しなかったりします。次の手順をしっかりと守ってチャレンジしてください。

播種の適期

3〜5月が最適です。発芽に必要な25〜30℃を自然に確保しやすくなります。

発芽までの手順

- 種子の果肉を除去する**：種子に付着した乾燥果肉がある場合は、水に短時間浸けてふやかし、キッチンペーパーで丁寧に拭き取ります。無理に力を加えて傷つけないよう注意してください。
- フタ（オペルキュラム）を外す（*O. pachypus* の最重要ステップ）**：種子の頂部には属名の由来となった「フタ（オペルキュラム）」があり、これが水の吸収と芽・根の出口を塞いでいます。カッターやキリを種皮との境目（ヘタのやや下あたりにある継ぎ目）に差し込み、テコの原理で静かに開きます。フタの正確な位置は個体差がありますが、頂部のヘタを基準に探してください。胚を傷つけないよう慎重に行うことが大切です。なお、ハイター漬けやヤスリがけは胚を傷めるため逆効果との報告があります。複数の栽培者による記録では、**このフタ外し処理を適切に行うことで早ければ2〜3日で発芽が始まり、2週間以内に60〜65%の発芽率に達した例**が報告されています（個人実験ベースの記録であり、種子の新鮮度によって結果は大きく変わります）。前処理なしの場合は1か月〜3か月以上かかることも珍しくありません。
- 殺菌・活力処理**：メネデル（100倍希釈）とベンレート（1000倍希釈）を混合した液に10〜20分浸します。カビを防ぎ、発根を助ける効果が期待できます。任意でジベレリン液（250〜500ppm）への6時間浸漬を加えると、さらに発芽を促す効果があると報告されています。

4. 用土を準備する：新しい用土を熱湯で消毒してから使います。古土の使い回しはカビの原因になるため避けましょう。
5. 播種する（覆土なし）：フタを外した部分が上向きになるよう種子を用土の表面に置き、覆土はしません。種子が重ならないよう間隔をあけて並べてください。
6. 温度・湿度を管理する：ヒートマットなどを使い約25～30℃に保ちます。腰水（容器底に1～2cmの水を張る）と1日数回の霧吹きで湿度を確保します。密閉すると湿度が過多になりやすいため、蓋は不要です。
7. 発芽後の管理：発芽したら温度28℃・湿度70%程度を目安に維持します。本葉が揃い始めたら徐々に通気と光を増やし、外の環境に少しずつ慣らします。初期は肥料は不要です。

O. decaryi の種子には O. pachypus と同様のオペルキュラム構造がありますが、除去の有効性についての情報は限られています。基本的には果肉除去＋殺菌処理を行い、発芽を待ちましょう。種子の新鮮度が発芽率を大きく左右するため、できるだけ新鮮な種子を使うことが成功の鍵です。

への水かけや殺ダニ剤で対処しましょう。

徒長（間延び）

日照不足・肥料過多・水やり過多が原因です。最終枝がジグザグにならず真っすぐ間延びする場合は日照を見直してください。屋外で直射日光に当て、水と肥料を控えることで予防できます。

実生時のカビ

播種後の高湿度環境ではカビが発生しやすいです。用土の熱湯消毒・殺菌剤（ベンレートなど）の使用・適度な換気で予防しましょう。密閉しすぎずに管理することもポイントです。

トラブルの大半は「水のやりすぎ」「落葉期の誤解」「日照不足」の三つに起因します。秋冬に落葉しても慌てず断水を守り、成長期は直射日光をしっかり確保することが、健康な株を維持する最大の秘訣です。

栽培メモ



オペルクリカリアの種子を探す
QRを読み取る／seedstock.jp

病害虫・トラブル

オペルクリカリアは適切な環境で管理すれば丈夫な植物です。ただし「落葉への誤解」と「根腐れ」は実際に多くの株を失わせているトラブルです。早めに気づいて対処しましょう。

最大のトラブル：落葉を「枯れ」と誤解しての過水

秋～冬に葉が全部落ちると「株が枯れてしまった」と感じ、慌てて水を与えてしまうケースが後を絶ちません。しかしこれがそのまま根腐れにつながります。落葉は夏型コーデックスの正常な休眠です。気温が15℃前後を下回ると落葉が始まるのを覚えておきましょう。幹に張りがあれば問題なく、春に気温が上がれば必ず芽吹きます。

根腐れ

過湿・水やり過多が主因で、特に「用土が湿ったまま低温にさらす」と急速に進行します。幹が軟らかくなってきたら根腐れのサインです。発見次第、植替えを行い、腐った根を切り取って乾燥させましょう。用土と鉢の排水性を見直すことが再発防止の基本です。

害虫

- ・ カイガラムシ：幹や枝に付着して吸汁し、株を徐々に弱らせます。風通しの悪い環境や弱った株に発生しやすいです。歯ブラシで丁寧にこすり落とすか、浸透移行性の殺虫剤で防除します。
- ・ ハダニ：高温乾燥下で発生しやすい微小害虫で、葉の養分を吸汁します。クモの巣状の痕跡が見られたら要注意です。葉